

未来の気象研究者を目指して

—九州支部第4回こども気象学会—

九州支部長 横山辰夫

九州支部では、日本気象学会（以下「気象学会」）の社会貢献の一環として「こども気象学会」の取り組みを行っています。これは、小学生を対象に気象に関する「研究」の成果を募集して、研究発表の場を設け、優秀なものについては表彰するというもので、今年で4回目になります。

福岡県内の小学校（約750校）を通じて、各校3作品までということで募集した結果、今年は夏休みの自由研究の中から21件の応募がありました。この中から、支部の担当理事を含めて4人が審査員となり、優秀作品賞としてこども気象学会賞（3人）、審査員特別賞（3人）、アイデア賞（1人）および調査研究賞（4人）を選びました。

夏休みの期間中一日も欠かさず雲の観察を続けたものや、高い山に登って気圧の変化を調べたもの、熱中症になりそうな炎天下で測定を続けたものなど、力作ぞろいでした。内容も、子どもらしい着眼点のものから、気象の専門家顔負けの高度なものまで様々でしたが、自ら調べるという科学の原点に立ったものが優秀作品に選ばれました。今年は、今夏の猛暑をテーマにしたものが目立ちました。

選ばれた優秀作品のうち、今年のこども気象学会賞の受賞者とテーマは以下のとおりです。

柴中郁乃さん（北九州市立小石小学校5年）

「大気汚染と酸性雨 私の町は大丈夫？」

大場莞爾くん（福岡市立塩原小学校6年）

「高層天気図で今年の天気を読む」

立花健人くん（北九州市立折尾西小学校6年）

「紫外線についての研究」

発表会と表彰式は10月27日（日）に福岡市で開催し、保護者や家族などを含めて約70人が出席しました。発表会・表彰式に先立ち、気象予報士の小林チカさんによる講演（気象キャスターの仕事、気象観測の方法、今年の福岡の猛暑）を聴いてもらいましたが、普段テレビで観ているキャスターの生の講演は子ども達にはインパクトがあったのではないかと思います。また、ステージに子ども達に上がってもらい、ペット

ボトルの中で「雲」を作る実験をしました。圧縮した空気を「ボン」という音とともに一気に抜くと、ペットボトルの中にできた白い「雲」に驚きの声が上がりました。気象予報士で同じくキャスターの松井 涉さんに雲ができる原理についてわかりやすい解説をしてもらいましたが、低学年には少し難しかったかもしれません。しかし、理屈はわからなくても不思議な現象を目の当たりにした驚きは何らかの形で心に残るものと思います。

各賞の受賞者には3分程度の持ち時間で概要をステージ上で発表してもらいました。皆落ち着いて堂々



第1図 発表の様子。



第2図 賞状授与の様子。

とした発表ができました。多くの人の前で、自分で取り組んだことの要点を発表するというのは、研究を行う際の基本であり、良い経験になったのではないでしようか。

今のところ募集の対象は福岡県内としていますが、支部の位置づけからは九州全体を対象にすることも検討課題と考えています。しかし、応募数が増加すると作品の整理や審査などに地方支部だけの力では対応出来ないおそれがあります。このためには学校や教育委員会あるいは学校教員の職にある学会員などに組織的な協力を求めるなど、運営方法の強化が必要になると思われます。

このようにまだ小規模な取り組みであり、試行錯誤を繰り返している段階ですが、子供たちの理科離れが問題になっている昨今の状況を考えると、このような取り組みが子供たちが理科に親しむためのきっかけとして有意義ではないかと思います。将来のわが国の科学技術を担う人材が少しでも増えることを期待したいと思います。特に子ども達にとっては理科の中でも気象は身近なテーマであることから、気象学会が果たす



第3図 最後の集合写真。

役割は大きいのではないでしようか。

なお、この取り組みは、福岡管区気象台との共催で行い、福岡県教育委員会、福岡市教育委員会および日本気象協会九州支社からは後援をいただきました。また、発表会と表彰式の運営に当たっては、福岡管区気象台および日本気象協会九州支社の関係者の皆さんに多大な協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。